みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

新しい展示手法の試み：みんぱくキッズワールドの遮蔽展示から

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-03-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 日高, 真吾 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00009087

新しい展示手法の試み
—みんぱくキッズワールドの遮蔽展示から—

日高 真吾
(ひだか しんご／国立民族学博物館)

1. はじめに

展示は、作り手（博物館）が得た知見や情報を効果的に受け手（来館者）に伝えるものであり、博物館活動の中心的な役割を担っている。わたしは、本来、博物館資料の保存を専門とする保存科学者である。そして、わたしを博物館資料の保存の道に導いてくださった森田先生も保存科学者である。しかし、森田先生は保存科学者という肩書きよりも「博物館屋」という肩書きを好んで使われる。そこには博物館で保存活動を行う場合、当然、博物館活動全般に精通しなければならないという「森田博物館学」の確固たる意思がみてとれる。このような先生の意思に触発されてしまったのか、わたしも今、博物館の資料保存に立脚しながらも、さまざまな博物館活動に興味を持っている。

ここでは、展示についてそれほど経験のないなか、森田先生に少しでも近づきたいという思いで取り組んだ、特別展「みんぱくキッズワールド－こどもとおとなをつなぐもの－」（以下、キッズ展とする）〔註1〕で試みた新しい展示手法について紹介したい。

2. キッズ展の概要

2.1 キッズ展の全体構成

2006年3月から6月にかけて開催したキッズ展は、本館の野林厚志助教授（当時）を実行委員長とし、わたしは副実行委員長として参加した。本展示は、文化人類学、あるいは民俗学的な見地からいろいろな国の子どもと大人の関係について考えるという趣旨のもと開催したものである（写真1・写真2）。

キッズ展の展示構成の概要は、展示場1階では、子どもの成長に合わせて、

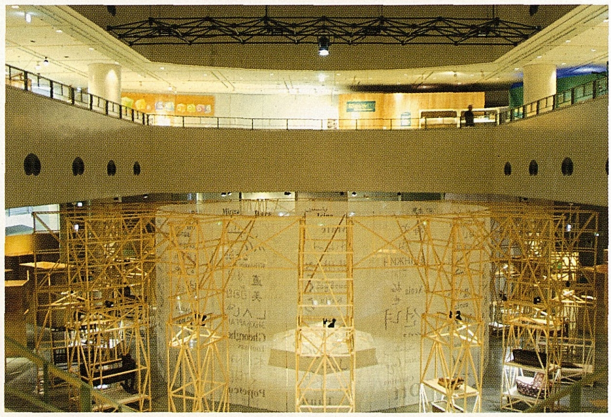


写真1
「キッズ展」の展示作業

写真2
「キッズ展」の展示会場

「誕生」、「名づけ」、「子どもたちへの贈りもの」、「子どもをとりまく環境」、「学びと遊び」という大テーマをつくり、展示コーナーを設けた。展示場1階の展示コーナーのレイアウトを図1に示す。また、展示場2階は1階で既にあつかった大テーマ「学びと遊び」をさらに展開する形で展示コーナーを設け、さらに各コーナーに体験型プログラムを盛り込んだ展示構成とした（写真3から写真6）。展示場2階のレイアウトを図2に示す。また、来館者の対象をおよそ小学校3年生から4年生とし、解説文のあり方を工夫することとした。

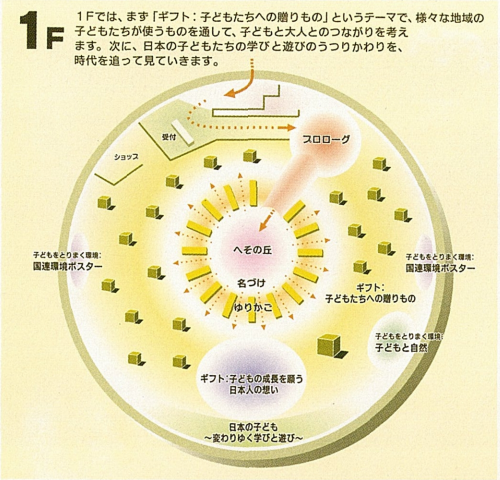


図1　展示場1階の展示コーナーのレイアウト

写真3
へんしん広場

写真4
あそびの広場

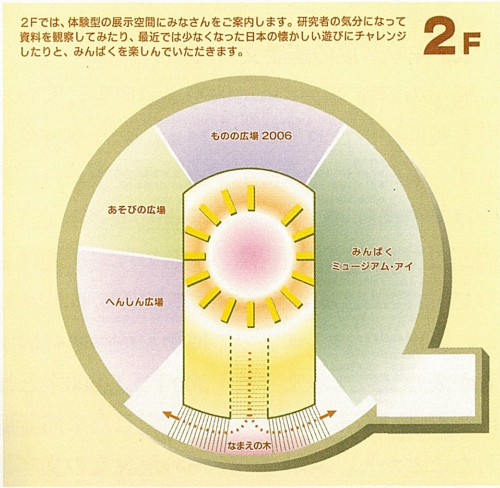


図２　展示場2階の展示コーナーのレイアウト

写真５
ものの広場2006

写真６
みんぱくミュージアム・アイ

2.2 キッズ展の解説文

展示の解説文は展示目的や展示内容に関わる情報が書き込まれ、来館者の観覧を補助する役割を担っている。したがって、来館者の体力や集中力を損なわせず、有効に情報を提供する役割が求められる。展示の解説文についてディーンはその経験則から、英語標記の指標として、導入部テキストは50から200単語、ただし、75単語程度の長さの段落を設けること、グループテキストは75から150単語、展示品ラベルは75単語以下が望ましいと提唱している〔註2〕。また、森田先生はこれまでの博物館活動の経験から、展示の解説文について来館者が読む気になる文字数を300字から600字と推奨している。そこで、キッズ展の解説文である。キッズ展で想定した来館者層は、子どもや親子連れの方々としたことから、展示コーナーの解説文の文字数は、思い切って減らすこととした。その結果、子ども用の解説文を50字、大人用の解説文を150字と設定したのである。その例として、展示コーナー「初宮参り」の解説文を表1に示す。

このように、キッズ展では展示コーナーの解説を子ども用、大人用と用意した。しかし、これらの解説文は、並列しておかれただけでは効果を発揮しない。特に1階では、子どもの来館者に資料をしっかり見てもらうことを目的としたため、これら2種類の解説文を有効に活用し、さらに展示資料を集中して見てもらえるための仕掛けが必要と考え、遮蔽展示を採用したのである。

2.3 キッズ展で試みた遮蔽展示の方法

キッズ展で採用した遮蔽展示は、展示資料を箱で覆い、一部の開口部「のぞき穴」からのみ箱内の資料をみることができる。いわゆる、僅かな穴からこっそりと見る「のぞき」という人間の好奇心を「展示を見る」行為に応用することを狙った展示手法である。自主的に自らの視界をのぞき穴に持っていかなければならないことから、集中した状態で展示資料を見ることが遮蔽展示の特徴のひとつになる。ここには多様化する子どもの興味に、作り手側から積極的に仕掛けて、子どもを展示に引き込み、集中して展示を観覧するという目的をもたせている。また、子ども用、大人用の2種類の解説文は、例えば、親子の来館者が同じ展示資料を観覧して、それぞれが子ども用解説、大人用解説を読んでいるとき、お互いが必ず視界に入るよう、のぞき穴の位置が関連しあうように工夫した。なお、のぞき穴は細長い楕円形のスリット状のものと丸い穴で作

子ども用	生まれて１ヶ月ぐらいたつと、元気に育つように神社にお参りすることを「お宮参り」といいます。
大人用	生後30日から33日（地方によっては、７日目から100日目というところもあります）までの間に、氏神に参詣するものです。母親の実家から贈られた祝い着を子どもに着せ、父親の母親が子どもを抱いて神社を参詣することが一般的で、子どもの長寿と健康を祈る習慣が伝わったものです。

表１　解説文の例（展示コーナー「初宮参り」より）

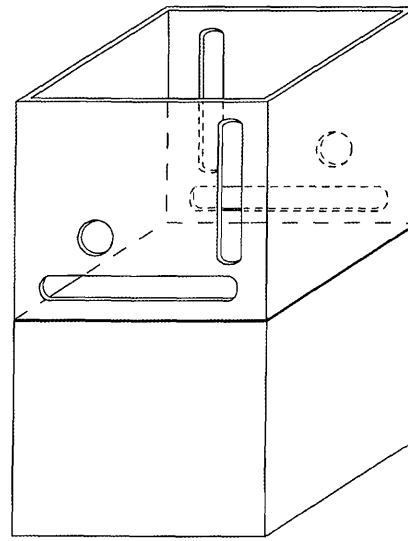


図３　展示箱概念図

り、子ども用、大人用、そして障害者用のものを用意することとした。展示箱の概念図を図３に示す。

以上のことからキッズ展の遮蔽展示は、「のぞく」という人の好奇心をいかに活用できるかどうかが成否の分岐点であったのである。しかし、キッズ展で採用した遮蔽展示は、のぞき穴の大きさによるものの、「のぞく」という行為を来館者に強いるため、けっして見やすい展示手法とはいえない。この遮蔽展

示の対極にあるのが、露出展示であろう。露出展示はみんぱくの本館展示場で採用されている方法（写真7・写真8）で、来館者は多くの資料を一望でき、さらに資料にぎりぎりまで近づいて隅々まで観察できる展示手法である。間違いなく遮蔽展示よりも来館者を疲労させない方法といえる。一方、多くの資料が一度に視界に入ってくるので、来館者の「飽き」を誘発させ、集中力を損なわせやすい弱点を持ち合わせた展示手法でもあると考える。

写真 7　本館展示場

写真 8　本館展示場

2.4 遮蔽展示と露出展示に関する一考察

展示手法について、ここで紹介した遮蔽展示や露出展示のような展示手法は、それぞれに展示のメッセージを効果的に伝えることを目的としたものである。しかしながら多様な来館者全員に対して、必ずしもこれらの展示手法がメッセージを伝える手段として万能的に機能するわけではない。例えば、遮蔽展示の場合、動線を歩いているだけでは決して資料は見えてこない。前述したように来館者自らが「見る」という行為を自発的に起こさなければ資料を見ることはできないのである。また、のぞくという姿勢が来館者を疲労させてしまうという問題点も上げられる。これらの点は、展示場の雰囲気を楽しみながら資料を見ることを目的とした来館者には苦痛を伴わせる恐れがある。また、キッズ展で用いた遮蔽展示特有の問題点として、意外なことが明らかになった。キッズ展ではのぞき穴に、アクリル板などのガードをしなかったことから、好奇心旺盛な来館者が、穴から手を入れて資料に触れて動かしてしまったり、資料を破損させてしまったりする事故が多発したのである。来館者の好奇心を利用する遮蔽展示では、当然このような事故は想定するべきであったのだが、私たちはこの点についてあまりにも無防備であった。そこで、早速この点を反省し、すぐにのぞき穴の横に「手をいれないでください」という標識を貼ることとし、さらに触られることで破損などのような大きな事故につながることが予想される箇所には、アクリル板でのぞき穴をふさぐ対策をとった。その結果、「手をいれないでください」という標識だけでも、のぞき穴に手を入れることで発生した事故は激減し、アクリル板でのぞき穴をふさぐ対策をとった後は、まったく事故は発生しなくなった。

このように、新しい展示手法として試みた遮蔽展示は、その経験の未熟さもあって、さまざまな問題点が浮き彫りになってきたのだが、対極的な展示手法である露出展示の場合はどうであろうか。露出展示は、確かに動線を歩いていれば自然と資料は目にはいってくる。しかし、動線を歩くうちに疲労が蓄積され、集中力が失われてきたときには、視界にはいってくる資料はただ漫然とおかれているだけのものとなり、それぞれの資料が持っている情報は来館者には届かない。この状況を示すものとして、民博で実施した来館者の動向調査の結果、動線の最初の展示ゾーンから最後の展示ゾーンにかけての来館者の滞留時間は、明らかに最後の方が短くなっているというデータが報告されている。こ

のデータの取り扱いについては、展示場の広さや展示デザイン、動線の環境など複数の視点からの解析が必要なのだが、膨大な資料の露出展示は、来館者の集中力の減退を促進させてしまう可能性があることを示したデータのひとつと考えている。

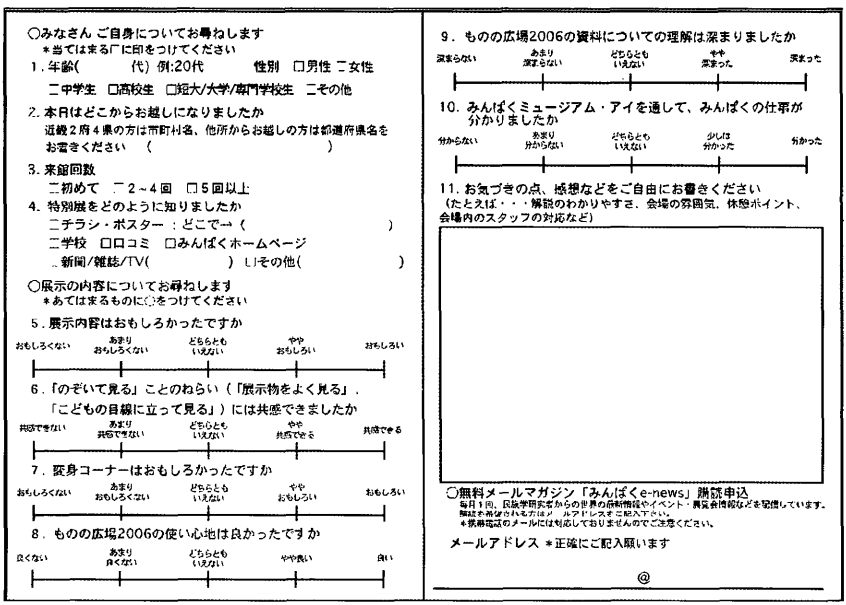
このように、遮蔽展示や露出展示は、それぞれ長所短所を持ち合わせた展示手法といえる。いずれにせよ、展示では採用する展示手法の短所を解決しつつ、長所を大胆に展開していくことが求められるものであろうし、その鍵は展示の作り手に委ねられるものであろうと考える。

3. キッズ展で試みた遮蔽展示のアンケートによる評価

3.1 キッズ展で使用したアンケートの概要

さまざまな弱点があることを承知した上で、「のぞく」という人間の好奇心に着目し、遮蔽展示を採用したキッズ展では、この展示手法について来館者がどのように感じたかを把握するため、本館機関研究員（当時）の加藤謙一氏と

図4　アンケート


○みなさん ご自身についてお尋ねします
＊当てはまる□に印をつけてください
1．年齢(　　代) 例:20代　　性別 □男性 □女性
□中学生 □高校生 □短大/大学/専門学校生 □その他
2．本日はどこからお越しになりました
近畿2府4県の方は市町村名、他所からお越しの方は都道府県名を
お書きください (　　)
3．来館回数
□初めて □2～4回 □5回以上
4．特別展をどのように知りましたか
□チラシ・ポスター ：どこで→ (　　)
□学校 □口コミ □みんぱくホームページ
□新聞/雑誌/TV(　　) □その他(　　)
○展示の内容についてお尋ねします
＊あてはまるものに○をつけてください
5．展示内容はおもしろかったですか
おもしろくない　あまり おもしろくない　どちらとも いえない　やや おもしろい　おもしろい
6．「のぞいて見る」ことのねらい（「展示物をよく見る」、「こどもの目線に立って見る」）には共感できましたか
共感できない　あまり 共感できない　どちらとも いえない　やや 共感できる　共感できる
7．変身コーナーはおもしろかったですか
おもしろくない　あまり おもしろくない　どちらとも いえない　やや おもしろい　おもしろい
8．ものの広場2006の使い心地は良かったですか
良くない　あまり 良くない　どちらとも いえない　やや良い　良い
9．ものの広場2006の資料についての理解は深まりましたか
深まらない　あまり 深まらない　どちらとも いえない　やや 深まった　深まった
10．みんぱくミュージアム・アイを通して、みんぱくの仕事が分かりましたか
分からない　あまり 分からない　どちらとも いえない　少しは 分かった　分かった
11．お気づきの点、感想などをご自由にお書きください
（たとえば・・・解説のわかりやすさ、会場の雰囲気、休憩ポイント、会場内のスタッフの対応など）
○無料メールマガジン「みんぱくe-news」購読申込
毎月1回、民族学研究所からの世界の最新情報やイベント・展覧会情報などを配信しています。
購読を希望される方はメールアドレスをご記入下さい。
＊携帯電話のメールには対応しておりませんのでご注意ください。
メールアドレス ＊正確にご記入願います
@

情報管理施設情報企画課が中心となって、アンケートの調査、集計をおこなった。アンケートの内容を図4に示す。

加藤氏がまとめられたデータを参照〔註3〕すると、ここで行ったアンケートの対象は会期中に訪れた中学生以上の一般来館者全員であり、会場入り口の受付でアンケートを配布し、出口付近の回収箱で回収した。配布したアンケートは9069枚、回収できたアンケートは1561枚であり、その回収率は17.2%である。従来の特別展におけるアンケートの回収率はおおむね2%程度とのことであるから、キッズ展で行ったアンケート調査は高い回収率であったといえる。

3.2 アンケートの結果からみる遮蔽展示の評価

図4のアンケートの項目の中で遮蔽展示の評価に関わる部分は、『6.「のぞいて見る」ことのねらい（「展示物をよく見る」、「こどもの目線に立って見る」）には共感できましたか』である。わたしたちは、遮蔽展示の評価について一抹の不安を覚えていたため、会期の中盤に当たる2006年4月19日に、アンケートの質問6の結果を確認することとした。その結果を図5に示す。

図5から、キッズ展の遮蔽展示について肯定的な印象をもたれたものを「やや共感できる」、「共感できる」とし、否定的な印象をもたれたものを「共感できない」、「あまり共感できない」、「どちらともいえない」と分類した。その結

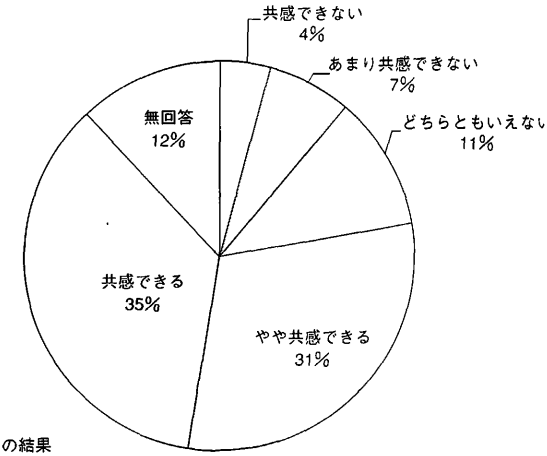


図5　会期中盤のアンケート質問6の結果

果、肯定的な印象が66%、否定的な印象が22%となる。つまり、このアンケートの結果からだけでは、一応、今回の遮蔽展示は多くの来館者に肯定的に受け入れられたといえ、私たち企画者にとっては喜ばしい結果となった。

しかし、遮蔽展示について否定的な意見が多くあったことも、22%の結果から明らかである。また、多くの来館者が訪れることが予想されたゴールデンウィークには、のぞきながら観覧することで、ひとつの展示箱の滞留時間が長くなる遮蔽展示は、会場内の混乱が予想された。そこで、わたしたちは、会期半ばでありながら、1階の大テーマ『子どもたちへの贈り物』コーナーのひとつである「子どもの成長を願う日本人の想い」（図１参照）の展示箱ののぞき穴を大きく解放し、遮蔽展示による来館者のストレスを緩衝するよう改造した。

4. まとめ

後世の人々に、過去の資料やまさに今私たちが使用している資料を残し、私たちの文化を後世に伝えることも博物館の重要な任務であるが、同時に今を生きている私たちが過去の文化、あるいは今の文化を知るための装置であることも博物館の大きな使命である。そのなかで展示活動は、社会と最も密接に関わる博物館活動の顔であろう。

今回、私が紹介したキッズ展では、私たちの伝えたいメッセージの対象を子

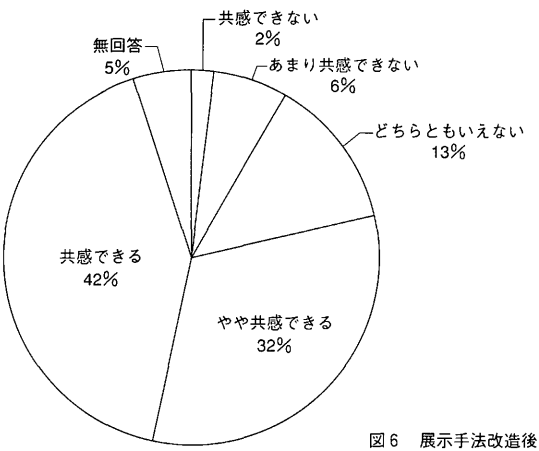


図６　展示手法改造後のアンケート質問６の結果

どもたちにおき、子どもたちが受容しやすい環境作りを心がけ、遮蔽展示という手法を採用した。その結果、来館者の方々にはアンケートをはじめ、さまざまな方面からご意見を賜ることができ、展示開催中に一部の展示を改造するという、通常では見られない特別展となった。改造後にアンケートの質問6の結果を分析すると、図6のようになり、肯定的なものが74%、否定的なものが21%となっている。図5の結果と比較した場合、否定的な印象のポイントはあまり変動していないが、肯定的な印象が8ポイント上昇していることから、ここで行った改造はひとまず成功したといえるだろう。また、社団法人日本ディスプレイ業団体連合会主催の「ディスプレイ産業賞2006」において、ディスプレイ産業特別賞（日本経済新聞社賞）、社団法人日本ディスプレイデザイン協会主催の「ディスプレイデザイン賞2006」において、ディスプレイデザイン奨励賞を受賞した。これらの受賞は、キッズ展の展示手法について、ある一定の評価を社会的にもいただいたと考えている。

これからの博物館は、これまで以上に、来館者の知的好奇心を満たす装置であることが求められると同時に、来館者の憩いの場などといった新たな役割も期待されることが予想される。その結果、博物館の顔である展示活動は、さらなるバリエーションが求められ、より挑戦的な展示手法も試みられると思う。

森田先生は、1998年に「なかはどうなっているの？　―民族資料をX線でみたら」展を開催した〔註4〕。この展示では現物の資料とその資料のX線写真を中心に構成し、肉眼では見ることのできない資料の構造やデザインを楽しめるものであった。それまでの博物館の展示では、一部のコーナーにX線写真を展示することはあっても、展示の全体構成を博物館資料のX線写真に据えた展示は、この「なかはどうなっているの？　―民族資料をX線でみたら」展がはじめてであり、森田先生の卓越した企画力が発揮された展示であったと考える。骨太な内容を作りこんで斬新な展示を展開する。そんな展示に、また挑戦してみたいと考えている。

〔註〕

1）日髙真吾・野林厚志編集『みんぱくキッズワールド―こどもとおとなをつなぐもの―』2006年　国立民族学博物館

2）デビット・ディーン著　北里桂一監訳『美術館・博物館の展示』P145-153 2004年丸善株式会社。ここで、導入部テキストとされるものは、展示の導入部に書かれる解説のことであり、グループテキストは展示コーナーの解説、展示品ラベルは、展示資料の解説を指す。

3）ここで紹介したデータは、国立民族学博物館機関研究員（当時）の加藤謙一氏が2007年5月30日に国立民族学博物館第202回研究懇談会で発表した際に使用されたデータを同氏の許可を得て、紹介したものである。

4）森田恒之『なかはどうなっているの？―民族資料をX線でみたら』1998年　財団法人千里文化財団